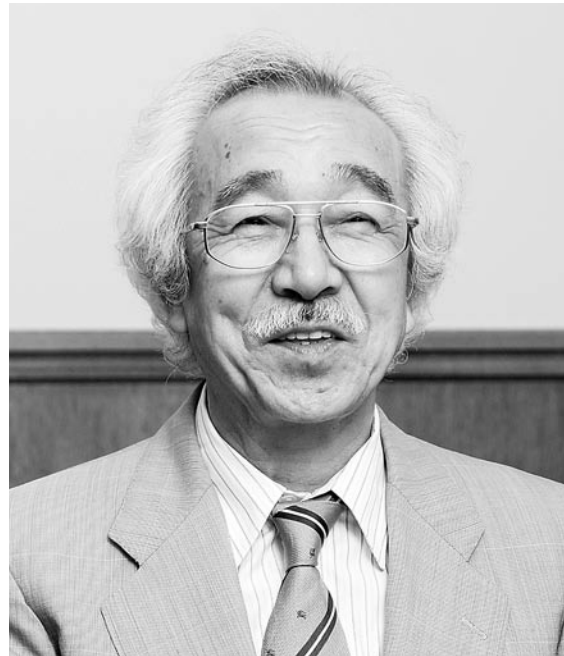


# 新時代の女性リーダーを育成したい

東洋英和女学院大学 学長

## 飽戸 弘



あくと・ひろし氏

1935年横浜市生まれ。59年東京大学教育学部教育心理学専攻卒業。66年埼玉大学教養学部助教授、75年東京大学新聞研究所助教授。77年から90年まで米オハイオ州立大学、コロンビア大学などの客員研究員としてしばしば渡米、研究に励む。82年東京大学文学部助教授、87年同教授。95年東京大学を退職後、本学教授。2005年より本学学長。現在、放送倫理・番組向上機構理事長、日本行動計量学会理事長。東京大学名誉教授。著書は『社会調査ハンドブック』『メディア政治時代の選挙』『売れ筋の法則』『コミュニケーションの社会心理学』など多数。

大学はいま、「冬の時代」を迎えているといえます。受験生が年々減少してゆくなか、どこの大学も生き残りをかけて、より魅力ある大学に生まれ変わるべく、必死の努力を続けていらっしゃるのではないのでしょうか。本学も例外ではありませんが、そんな時代だからこそ、あらためて理想や理念を追求していくことが重要であると私は考えています。

本学の理想・理念は、「専門教育の重視」です。ひとつの専門分野をしっかりと学び、さらにその隣接領域についても幅広く学ぶ。これが本学が志向する、専門教育に根ざした「リベラルアーツ教育」です。具体的な方策として、2007年度より専攻別の新カリキュラムをスタートさせました。たとえば人間科学部人間科学科には3つの専攻がありますが、学生はそのうちの1つの専攻で高度な専門教育を修めるとともに、ほかの2つの領域についてもカバーし、豊かな教養を身につけることができるというものです。

リベラルアーツといえば、一般には「広く、浅く」知識を習得する教育と捉えられがちですが、私個人は異なる考えを持っています。社会に出てからも、学校で「広く、浅く」学んできた人よりも、専門分野をしっかりと学んできた人のほうが応用力があり、仮にまったく畑違いの仕事を任されたとしても、十分な対応力があるとされています。その意味で、本学が掲げる理想は間違っていないと思います。

### 社会の要請と大学の伝統に根ざした改革

しかしながら本学も大学として、現在の生存競争を免れることはできません。理想を追求するだけでなく、社会の要請に配慮し、学生の要求に沿うことも必要です。そこで、ほぼ3年がかりで、大規模な改革に着手してまいりました。

今回の改革は、大きく2つの柱に集約されます。ひと

つは「国際交流」です。国際社会学部国際社会学科国際コミュニケーション専攻において、今年度カリキュラムより「希望者全員海外研修」をスタートさせます。海外留学、語学研修、あるいは海外ボランティア活動などを、幅広く単位として認めるプログラムで、受験生にもたいへん評判がよく、これにより志願者が30%以上増加しました。原則として「希望者全員」という約束ですから、こちらはいまその実現のために、海外のさまざまな大学・教育機関とコンタクトをとり、提携を進めているところ

です。もうひとつの柱は「資格取得」です。幼稚園と保育所の連携を促進していく政策の流れを受け、本学も幼稚園教諭免許と保育士資格の両方取得できるようになりました。また、今年度より中学校と高校の教員免許も取れるようになります。こうしてさまざまな資格を取得するための体制も整えつつあります。

これらの改革は、単に社会の時流に乗った取り組みということではありません。本学は東洋英和女学院としての120年の歴史のなかで、「英語の英和、保育の英和」という評価を得てまいりました。その伝統を踏まえ、その上にあらためて築き上げようとしているものがこの2つの取り組みなのです。なお、2006年度より国際交流センターと総合実習センターという2つのセンターを新設しました。「国際交流」と「資格取得」というテーマに対応した改革の中心機関として、今後より一層稼働させていくことになるでしょう。

### 女子大学ならではの価値を大切にしたい

昨今、男女共学の大学へと転換する女子大学が増えています。この傾向は日本だけでなく、アメリカや北欧も同様です。そうした世界的な潮流のなか、本学は共学に切り替えることなく、女子大学という現在のスタイルを堅持していく所存でおります。と申しますのも、女子大学には、共学にはない確固たる利点があると考えている

からです。それは女性リーダーが育つという点です。

男女共学の大学でよく見受けられるのは、たとえば部活動やサークルにおいて、部長は男性、副部長や書記は女性、といった組み合わせです。それが悪いとは申しませんが、女性がリーダーシップを学ぶ環境としてベストとは言い難い。本学は学生全員が女性ですから、当然ながらあらゆる組織で女性がトップを務めます。運動部の部長や学園祭の委員長など、数十人のメンバーを従えるトップの学生は、はたで見えていてもまことに頼もしいものがあります。

親御さんのなかには、「共学よりも女子大のほうが安全だから」といった理由で女子大を望む方がいらっしゃいますが、それよりも、私はむしろ共学よりも女子大学のほうが統率力や指導力、責任感が身につくといった点がメリットであると考え、お伝えしています。そのような、新しい時代の女性リーダーを育てる機関としての価値を社会に認めてもらえるようになれば、女子大学の存在感はいまよりもはるかに高まっていくでしょう。

また一方で、この厳しい競争環境にあって、受験生の減少に合わせて大学の規模そのものを縮小均衡している印象がありますが、本学はその方向も選択するつもりはありません。小さな大学には、小さな大学なりの良さがあります。少人数クラスや教職員の手厚いサポートなど、個々の学生が能力を伸ばし、夢をかなえることのできるきめ細やかな教育が実現できるのです。しかし、このスタイルをキープするには、いま以上の経営努力が必要になることは間違いありません。改革に尽力し、個性化・ブランド化を進め、広報にも一層力を入れていく。現在の規模を維持していくことは簡単ではありませんが、無理なこととも思いません。少なくとも私がこの大学にいる限りは、共学に転換することもせず、縮小均衡もしない覚悟です。それが私の使命と感じております。